

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

⑤ お金と責任

村本 邦子

人生において、私をもっとも愛するものは自由である。自由を妨害するものは憎むべきものということになるが、その代表として、所有と依存の欲望を挙げることができる。人間はあまりに弱く小さな存在であり、その誘惑はあまりに大きいので、ややもすると、自由を諦めるか（いわゆる「自由からの逃走」である）、もしくは、もっとも手っ取り早い方法として、自分自身をそれらと無関係なところに置くと決めてしまうことになる。少数派かもしれないが、私自身は後者の選択の方が好きである。基本的に1人で生きるという選択である。もちろん、孤立して生きるというのとは別のことだ。

人と一緒に仕事をすると、所有と依存の欲望が頭をもたげる。所有の欲望とは、自分の思うようなペースで自分の思うように事が運ばれてほしいと願う欲望、依存の欲望とは、全面的に人をあてにしてしまうという欲望である。どちらも支配の裏表だ。一人ひとりが違う人間である以上、どちら

も完全に適うことはあり得ないし、本当のところ、どちらが適ったとしても満足は得られない。なぜならば、それは孤独の証しになるだけだから。思うに、DVの加害者やカルトの教祖は、全面的に人をあてにし、すべてを自分の思い通りにしたいと望んでいるが、実際には、人間は完全なロボットになりきれないからこそ、飽きることなくその役割を続けていけるのではないだろうか。

組織で仕事をするうえで大切なのは、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行であろう。しかしながら、複数の成員からなる組織において、成員すべてが自律的で成熟しているということはあり得ないから、結局のところ、誰かが誰かのフォローをすることで辻褄を合わせつつ、組織は回っていくものである。その時に、所有と依存の欲望が少しでも頭をもたげると、フラストレーションを抱えることになる。自分という人間の器を鍛えていけば、それは乗り越えられるものなのかもしれないが、それは

途方もなく労力を要するプロセスだと思える。できれば、そんなものとは無縁でいたかった。

だから、人を雇うというようなことは思ってもみななかったし、組織として仕事をするつもりはなかった。女性ライフサイクル研究所は、個人事業主の集合体であり、やりたければ、それぞれが自分の責任で仕事すればいい、お互い、子育て中の身だから、場を共有していれば、困った時に助け合えていいんじゃないのという意識があった。だからこそ、次々と「私も何かやりたい！」という人が現れた時、「給料も交通費も払わないけど、やりたいことがあったら、自分でやってね」と受け入れた。もともと、来るもの拒まず、去るもの追わずの私である。

こうして加わった人たちは、何かをやりたくてたまらない人たちだった。子どもを保育所に預けるといふ人まで出てきたのには内心驚いた。そこまで気合いを入れて働くのか。繰り返すが、開設当初、私自身が仕事と位置づけていたのは週1日の開業カウンセリングだけで、あとは、それまでプライベートでやっていた活動をもう少し公的なニュアンスでやってみようと思ったにすぎなかった。それに比べると、他の人たちは熱い想いを抱いて何ものかに突き動かされるように動いていた。あれやこれやとアイデアをひねりだしては行動を起こしていくので、私はただただ圧倒されていた。

最初に、待ったをかけなければならなかったのは、活動の請求がこちらに回ってきたときだった。もともと場所代や維持費

は私が持っていたし、1回千円でグループに参加していたお客さんたちが次々、スタッフになっていくのであるから、人手は増えたとは言え、収益は下がる一方である。これではたまらないと思って、何度も話し合いの場を持ち、基本的にそれぞれの事業収益はその人のものであるから、収益が出れば一部を運営費に入れ、個人の経費は自分で賄うというルールを決めた。

お金の問題は、いろいろな側面から、繰り返し私たちに突きつけられた課題だった。ある時、ひとりのスタッフがシンポジウムに出て、年配の男性から「あなたたち、そんなによいことをしているのだったら、どうして有料にするの？お金なんかとらず、ボランティアでやりなさい」と言われ、憤慨して帰ってきた。私自身が経験したのは、「有閑マダムの趣味」という陰口だ。なんたる侮辱！有閑マダムの趣味で女性問題がやれるものか。何しろ、私たちは、あの時代に子どもの虐待や性暴力の告発をしていたのだ。私たちは歯ぎしりして、自分たちのやっていることの意味を確認しあった。たとえ高額でなくても、有料でプロとして責任をもってサービスを提供したい。

たぶん、こんなふうにして、私はだんだんと、皆の想いに巻き込まれていったのだろう。夫との関係もあった。子どものことは、基本的に私が何とかする。私に予定が入るときは、夫が融通する。だけど、仕事が増えた時には、夫の仕事が優先される。夫の給料をあてにして生活しているのだからやむを得ないとも思う一方で、何だか釈然としない思いも残った。彼は決して経済

を持ち出して権力をふるうタイプの人ではないが、自分のなかにわだかまりができたので、翌年からは、定収入を得るために非常勤講師に出ることにした。最初は1ヶ所だったが、1番多い時は4ヶ所で半期に7コマほど教えていた時代もあったから、今よりたくさん教えていたことになる。もとより、教えるのは嫌いな仕事ではない。この時代の教え子たちのなかにも、対人援助職者として頑張っている人たちが結構いるのだ。

大学への誘いはコンスタントにあったし、仕事はまだまだたくさんあった時代だった。周囲からは「もったいないね」と言われたものだが、少なくとも子育てを終えるまでは、フルタイムで働くつもりはなかったし、何がもったいないのか不思議だった。本当のところ、フルタイムで働くより、24時間営業の自営の方が忙しいと言えなくもないのだけど、私にとっては、自由度の感覚がまったく違ったのである。とは言え、子どもたちはどんどん大きくなり、親の手を離れていく。私個人に関して言えば、外で定収入を得ながら、開業カウンセリングの方もトントン拍子に増え、講師や執筆の依頼も結構あって、95年にはそれなりの安定した事業収入が見込めたので、96年には、年数回のオムニバス形式のものをのぞいて、非常勤講師は全部やめてしまった。

そんななかで、他のスタッフたちもそれぞれに事情を抱え、勉強を始めたり、資格を取ったり、家計を助けるために就職したりもした。正直なところ、自分で事業を起こすと言っても、最初の5年、私以外の人

は、たいして稼ぐことはできなかったのだ。だからと言って、誰も女性ライフサイクル研究所をやめる気はなく、それぞれ、いずれはここで立てるようになりたいという野望を持っていた。いったん始めた事業を放り出すわけにもいかなかった。誰かが始めたことも、やむなく残るスタッフで引き受けたが、実務的な仕事量は半端でなく、少しずつ内部での仕事にもお金をつけることにしていった。

私としては対等な立場で仕事をしたいと思っていたものの、どうやら経済的に対等にやるのは無理であるから、いずれはそれを目指して無理のない範囲でという妥協策だった。何とも複雑な気持ちにさせられるのは、夫たちの経済格差である。いくら熱い思いがあっても、家計を助けなければならぬ人は外で働かなければならなかった。自分にそこまで責任はないと思いつつ、内心、他のスタッフの家計の心配までしている始末だった。日本の女性史にはいわゆる「主婦論争」というのがあるが、この時代、そこに登場する複数の論理をほとんどひとめぐり実体験したような気がする。結論は出ない。

そして、事件が起こった。1人のスタッフが社会的問題を引き起こしたのだ。それまで、「それぞれが自分の責任で」と言ってきたものの、いざとなったら、私には関係ないと割り切ることなどできなかった。人と人が関わることである以上、お金ですむ話ではない。何より私は代表として名前を出していたし、専門家として一番責任の重い立場にあった。結局、これについては、

その後 10 年フォローすることで責任を果たしたが、長く続けていれば、遅かれ早かれ事件は起こるものである。この時に思い知ったことは、結局のところ、社会的に言えば、私が責任者であることは否定できず、何か起こった時には逃げも隠れもできないのだということである。それならば、いっそ潔くリーダーであることを受け入れるしかないじゃないかと腹を括った。

結論を言ってしまうえば、意外にも、私は馬鹿なお人好しということになる。何であれ好きなことを一生懸命やるのは絶対的善であるという信念を持っているために、どうしてもやりたいという熱意とガッツを感じると、つい応援したくなってしまうのだ。こうして、1 年も経つ頃には、私が経済的にも、実質的にもリーダーとして責任を負う体制が作られた。

私の希望は、それに皆の希望も、いつの日にか、ここで一人前に立つことだった。それぞれ日々、勉強を積んで、誠実により仕事を重ねること、狭い世界に閉じこもらず、どんどん外へ出て視野を拓けることを皆に言い続けた。自分自身に言い聞かせたことは、所有と依存の欲望に負けないこと、女性ライフサイクル研究所は私のものではないし、私は私として常にそこから自律しているということである。社会的に見過ごせないギリギリの線までは、たとえ私の思いと違ったことが起こったとしても、メンバーの自由と責任に任せ、失敗を受け入れた。関係性としては、いつも変わらず助け合う共に生きる仲間であったが、仕事上は相当程度、私が皆の面倒を見てきたことに

なる。私には試練の連続だった。あまりの重荷に、2~3 度、解散宣言をしたことがあったが、解散させてはもらえなかったし、やり始めたことの社会的責任を途中で放り投げることは、やっぱりできなかった。

果たして、私は自由に生きてきたと言えるのだろうか。どうひいき目に見ても、肯定してもらえそうにない。それでも、自分としては、自由を放棄しないよう常に努力を重ねてきたし、それなりの成果をあげてきたと思っている。女性ライフサイクル研究所という組織は、役割のアンバランスさこそあったものの、目的の共有、役割の分担と合意、責任と遂行をそれぞれが自律的に請け負うよう促しながら回してきたのだ。リーダーとして鍛えられたし、何より、私たちがこれまで社会で果たしてきた役割を考えれば、「よくもまあ、ここまで私をフル活用して、社会に役立たせてくれたもんじゃないの!？」と感心するばかりである。初期のメンバーの粘り強さ、あるいは執念深さなしに、女性ライフサイクル研究所はあり得なかった。そして、皆が皆、大きく成長した。自分自身をも含めてだが、それは本当に感動的なプロセスだった。

それぞれのメンバーが成長し、ようやく皆が将来有望な同僚になるかもしれないと思えた 2002 年、私たちはついに経済的に対等になって、研究所を法人化した。その時、私は、「皆のここまでの成長を認め、これからの成長を待って、もう 10 年だけリーダーとしての責任を負うから。でもその後は私を解放してね」と言い渡した。それがちょうど来年にあたる。